

千葉ローカル線の旅 2022



2022年3月

旅のチカラ研究所 植木圭二

千葉県にあるローカル鉄道の小湊鉄道、いすみ鉄道、そして銚子電鉄に乗るという1泊2日の旅に友人たちと行ってきた。期待外れもあれば期待以上もあって、いろいろな体験ができて面白い旅になった。

■友達の友達は友達

3月も春分の日を過ぎて、桜の開花宣言があちこちで聞こえ始めている。とはいえ本日はあいにくの雨で、かなり肌寒い。私たちは千葉縣市原市の小湊鉄道五井駅で列車に乗り込んで発車を待っている。車内は暖房が効いていて外の寒さは感じない。

その暖かい車内では和気あいあいと言葉が交わされている。会話の主は今回の旅行に参加した人たちで、メンバーは私を含めて6人だ。

そのメンバーとは昨年11月「富士山と山梨の旅」に一緒にいった4人に今回2人が加わった。まず4人を紹介する。私と地球一周の船旅で知り合い私が師と仰ぐ御年88才の“鳩（にゅう）さん”、彼のプール仲間の“ミーサ”は4か国語を操り芸術方面にも多彩な才女、そして私の高校時代のサークル仲間だった“チーマ”も芸術好きで地域活動にも熱心なアクティブ・レディだ。

さらに今回加わった2人は、ミーサがケガで入院していた時に病室で知り合った“ムラさん”は元気な80才の男性、鳩さんとミーサのプール仲間の“セキねえ（姉）”は私より少し年上の落ちついた感じのレディだ。

みんな面白そうなメンバーで楽しい旅になりそうだ。私はこのグループを「友達の友達は友達」と名付けており、今までもそして今後も人間関係の広がりを楽しんでいる。

■小湊鉄道

列車はゆっくりと動き出す。ディーゼルエンジンの音が予想以上にうるさいので静かな旅の始まりにはならないが、むしろ威勢のいいマーチングバンドに送り出されるようで頼もしく感じる。

列車は2両編成で、2両合わせて30人くらいの乗客が乗っている。その半分くらいは観光客のようで意外に若者が多い。むしろ私たちが年配者の最たるものになっている。

出発してしばらくすると都会の商業地域から住宅地へ、そして田園風景に代わり、やがて野原や川という風景になる。所どころ菜の花が咲いているが黄色いっぱいになるのにはまだ早いようだ。今回の旅は桜と菜の花の共演を期待していたが、桜は菜の花以上に期待できない状況だ。

小湊鉄道は五井駅から上総中野駅までを結ぶ 39.1km の鉄道で房総半島を縦に走っている。いすみ鉄道と合わせると房総半島横断になり、私たちは房総半島横断切符で乗車している。

小湊鉄道の生い立ちについて調べてみると、私はてっきり旧国鉄または JR の払い下げ鉄道かと思っていたら 100 年以上も前に純粋な私鉄として誕生している。現在はバス事業も行っており、むしろバス事業の方で高い収益を上げているというから経営的には問題ないらしい。

それにしても何の変哲もない車内で、沿線もまた特筆すべき景色もない。しかも雨ということもあって私たちは車窓の景色を眺めるよりもこれから始まる旅に期待して会話が弾んでいる。

■いすみ鉄道

上総中野駅で小湊鉄道が終わり、これからはいすみ鉄道の線路が外房の大原まで続いている。私は小湊鉄道といすみ鉄道は昔一本の鉄道だったと思っていたら、線路が繋がっていた形跡が全くない。この 2 つの鉄道の生い立ちは、どうやら違うものだということが理解できる。



【上総中野駅のホーム 左がいすみ鉄道 右が小湊鉄道】

いすみ鉄道は旧国鉄の 26.8km の木原線を引き継いだもので、経営的には沿線自治体や民間企業が出資する第三セクター方式で運営している。その出資者は千葉県 34%、大多喜町 15%、いすみ市 14%などとなっているから、この鉄道は地元自治体に支えられている。

もちろん、というと失礼だが、赤字経営なのでそれらの自治体が赤字補てんをしているのだろう。それゆえ、いすみ鉄道は集客のため様々なイベントや特別列車を運行させていることはニュースや旅番組で度々紹介される。

いすみ鉄道の車両は沿線の菜の花畑をイメージして黄色く塗られており、下の方には葉や茎を意識してか緑のストライプが入っている。実にシンプルで分かり易いデザインだ。

車内に乗り込むとランタンが天井からいっぱいにぶら下がっている。その光景は日本的なものではなく中華的なもので驚いていると、チーマが「ここにポスターが貼ってありますよ」と言っている。ポスターには「台湾鐵路管理局の集集線と姉妹鉄道の縁組みを結んでおり、台湾ランタン列車『祈福』に乗ると願いが叶うんだって！」と書かれている。



【いすみ鉄道のランタン列車】

座って車内を見渡すと、先ほどまで乗っていた小湊鉄道よりも少し混んでいる。と言っても上総中野駅で何人かが降りて駅を出たが、ほとんどの人が乗り換えているので2両編成が1両編成になったために座席が少し詰まっただけだろう。

房総半島の南部まで来たためだろうか、沿線の景色は菜の花畑が少し増えたような気がする。それにしても桜はまだつぼみで、寒さも雨も変わらない。

私は今回のローカル線の旅はいすみ鉄道がメインだと考えていたが、ランタン以外は何もないようだ。それゆえ何か物足りない気分になっている。期待していた分、落胆も大きい。

■大多喜城

大多喜駅で下車して大多喜城まで歩く。本日はあいにくの雨、それも雪混じりの冷たい雨で私たちロートル軍団の足取りは重い。約20分の行軍の末、ようやく城に到着する。

大多喜城は3層4階の城の形をしているが、古い城ではなく1975年に鉄筋コンクリートで建てられた歴史博物館になっており、そのため正式名称は「千葉県立中央博物館大多喜城分館」という。残念ながら本日は修理のために閉館中で、全くもって踏んだり蹴ったりの状況だ。せめて桜が咲いていれば救われたのと思っているのは私だけではないだろう

それでも敷地内に研修館という施設があり、雨宿りも兼ねて入館してみると千葉県の城の一覧地図が貼ってある。ムラさんとミーサは「こんなにいっぱい城があったの、千葉県民なのに知らなかった」などと言っている。私にもわかりに神奈川県のを調べようという気持ちになる。

大多喜城の直ぐ隣、おそらく昔は城内だったところに大多喜高校がある。雨の坂道を降りていると、高校生たちが雨の中をマラソンの練習をしており、誰からともなく「頑張れよ！」と声が掛かる。すると白い息を吐きながら高校生たちが大きな声で「ハイ！」と答えてくれるのが、何となく頼もしくそして嬉しい気持ちになる。

その大多喜高校に行ってみる。校門をくぐると大多喜城医薬門という古い門があり、説明看板には大多喜城で唯一現存する遺構だと書かれている。ずっしりとした風格のある門で校舎の脇の玄関近くに建っている。

薬医門とは、簡単にいえば2本の門柱の背後だけに控え柱を立て切妻屋根をかけた門で、本来は公家や武家屋敷の正門などに用いられたが、のちに医家の門として用いられたという。

そしてもう少し校内に入ったところに、こちらも当時使われていた大井戸がある。高校生たちが落ちないように高い柵に囲まれている。

玄関近くに古い門があつて、校庭に井戸があつて、校庭からはコンクリート製とはいえ大多喜城が直ぐ近くに見えるから、実に素晴らしい環境になっている。それにしてもこの高校は季節によっては観光客が多く訪れるので、それはそれで大変かもしれない。



【大多喜高校 左手前に薬医門、奥に高校の校舎、そのさらに奥に大多喜城】

大多喜町は国内で初めて液体状の天然ガスが発見された町で、その天然ガスの開発や供給の歴史を紹介している「天然ガス記念館」が大多喜駅のすぐ前ある。

私たちは列車待ちの時間潰しと雨宿りを兼ねてその記念館に入ってみる。受付のカウンターに人が座っているので、私は「少し見学させてください」と声を掛けたが、何も返事がない。おかしいと思いつつカウンターを良く見ると座っていたのは人間ではなく人形だった。

これには私たち一同は驚き、そして笑うしかない。

それにしても人形の配置、マスクと眼鏡をした人形の顔つきなど、これを考えて置いた人のセンスの良さが感じられる。



【天然ガス記念館の受付】

■伊勢海老旅館

今宵の宿は鳩さんがいすみ鉄道終点の大原駅近くの旅館を予約してくれている。駅から歩いて15分くらいと聞いて行軍するが、雨の中そして年配者にはなかなか厳しい。たどり着くと、看板には「伊勢海老旅館 伝九郎」と書かれており、鳩さんは料理重視で予約したと言っている。

そのゆえ夕食には伊勢海老を中心に刺身や金目鯛の煮付け、陶板焼き、天ぷらなど豪華な料理が並ぶ。雨の行軍の疲れは、これらの料理で一気に吹き飛ばされ、酒も入って盛り上がる。そして部屋に戻ってから終わることのない宴会が続く。

鳩さんは「このために旅行に来ている」と言っている。そして皆も「同感!」と言っているが、ミーサとセキ姉はアルコールが苦手で一滴も飲んでいない。それでも6人全員で盛り上がるのだから何ということか。私は酒飲みの友達は酒飲みと思っていたが、その常識は覆された。

翌日の朝食では、昨日の夕食で存在感を示していた伊勢海老の頭が味噌汁で出てきた。そういえば昨晚ミーサが私に「これ明日の朝食に出てきそう、名前を書いておこうか」と言っていたのを思い出した。海老には何となく“M”の文字があるように見える。



【伝九郎の夕食】



【伝九郎の朝食】

■旅の目的

旅の2日目は、これといったスケジュールが組まれていない。その理由はミーサとムラさんが午後から用事があるって朝帰宅するというので、当日決めようということになっていた。

それに加えて私は妻と、チーマは友人とそれぞれ明日から飛鳥IIクルーズに乗船することになっており、早い時間に帰りたいという気持ちがあった。ところが昨日旅行会社からそのクルーズが船の故障で急遽中止になったと連絡が入った。さすがに2日前の中止連絡は珍しい。チーマもその友人も初めてのクルーズということで大そう期待していたが、その反動でかなり落胆していた。その代わりにとっては何だが、本日は丸一日たっぷり時間が使える。

昨日は雨にたたられたが、本日は晴れ予報で挽回するにはもってこいだ。そんな気持ちのもとで本日の予定が話し合われる。

寺社仏閣巡り、イチゴ狩り、昨日雨だったので昨日のルートに戻る、チバニアンという国際的に有名になった地層の見物、外房線と内房線に乗って房総半島一周など多くの案がでて、さらにそれらの組み合わせ案も出てきた。ちょっと収拾がつかない状況になってくる。

そんな時私は「ところで、今回の旅の目的は何だった？」とつぶやいた。それはむしろ私自身に問いかけたと言った方がよいかもかもしれない。

鳩さんもチーマも「ローカル線だよ」と口をそろえて言う。

するとセキ姉が「それならば銚子電鉄なんかどう？」と言う。彼女は数年前の台風の際に犬吠埼のホテルに泊まっていたホテル全体が被災したが、従業員の献身的なサービスに感激したと昨夜の宴会で言っていた。その彼女が銚子から犬吠埼までの銚子電鉄が面白いと言っている。

私たちの気持ちは本日の天気のように晴れて、銚子電鉄目指すことになった。

■銚子電鉄

大原からJR線に乗ってJR銚子駅にやって来る。

私が銚子電鉄に乗り継ぐために出口を探していると、鳩さんが「こっちだよ」と大声を出して私を呼び寄せている。行ってみると私たちの降りたホームのずっと先の端に銚子電鉄の乗り場がある。

銚子電鉄の車両の前で写真を撮っている家族連れがいて、どこから来たのかを聞くと「茨城県の鹿嶋から」と答えてくれる。付け加えるように「赤字の銚子電の一助になれば」とも言っている。



【銚子電鉄の銚子駅のホームと車両】

銚子電鉄は赤字でも頑張っている。そのことは私も少しは知っていたが、隣の茨城県からもそれを知って応援にくるとは驚きだ。

車内に乗り込むと、昨日乗った2つの鉄道とは全く違うように感じられる。それはこの鉄道は危機感が感じられるからだ。赤字でいつ潰れるか分からない中でも頑張っているというもので、車内には「電車をとめるな！」や「絶対にあきらめない」といった文言のポスターが目にとまる。この鉄道は本当に大丈夫なのかと、本気で心配になってくる。

駅に置いてあったパンフレットを見ると面白いことが書かれている。2017年に公開された「カメラを止めるな！」という製作費300万円のチープな映画がSNSや口コミで全国に拡大して大ヒットした。その名前をもらって幸運にもあやかろうと2019年に出版された「電車を止めるな！」という小説を翌年に銚子電鉄が映画化した。サブタイトルの「のろいの6.4km」は“呪い”と電車が“鈍（のろ）い”を掛けており、キャッチコピーの「超C級映画」は、銚子（ちょうし）に掛かっている。赤字でも悲壮感がなく、どこまでも明るい。

電車が走り出すと、確かにのろい。家々の間を走り抜けていくのでスピードが出せないようで、それは神奈川県江ノ電に似ている。ただ江ノ電ほど乗客は乗っていない。それでも昨日乗った小湊鉄道やいすみ鉄道よりも乗客の人数は多いように感じられる。

電車は「笠上黒生（かさがみくろはえ）」という駅に着いた。ところが車内放送ではその名前以外に「かみのけくろはえ」と放送している。その看板「髪毛黒生（かみのけくろはえ）」もホームに立っている。

私は電車内で隣に座っている地元の人らしい女性に「これは何ですか？」と聞いてみると、女性は「地元民に公募して各駅にネーミングライツというニックネームのようなものが付けられたのですよ」と教えてくれる。彼女の情報によると銚子駅は「絶対にあきらめない」、そして終着の外川駅は「ありがとう」というから、気構えと感謝の気持ちが伝わってくる。



【笠上黒生駅のプラットホームの2つの看板】

犬吠駅で降りて、お決まりの「犬吠埼の灯台」にやって来る。灯台は私たちをよく来たねと迎入れてくれているようだ。昨日乗った2つの鉄道はこれといった観光名所がなかったが、銚子電鉄には犬吠埼がある。これを上手く使ったら良いのにと親身で考えてしまう。

また、この岬は、音痴の人の別名にもなっている。そう“調子（銚子）っぱずれ”だ。おっと、私も銚子電鉄のネーミングライツにはまっている。

犬吠駅の駅舎には銚子電鉄の売店があって、名物の「ぬれ煎餅」などを売っている。銚子電鉄は赤字経営が続いて公的な支援を受けているものの鉄道事業以外の副業にも力を入れている。その最たるものが食品事業で主力商品の「ぬれ煎餅」や「まずい棒」などの製造販売を行っている。年間約5億円の売上高のうち鉄道以外が8割を占めるというから鉄道事業をやめれば黒字になる。しかしやめないのは地域のインフラ、住民の足を維持するという強い決意があるからだろう。

私もそんな銚子電鉄の支援のために「ぬれ煎餅」と「銚電チキンカレー」を購入する。ぬれ煎餅は銚子電鉄が1995年に最初に手掛けた食品で、チキンカレーは“資金（しきん）枯れ～（カレー）”と掛けている。ついでにカレーの箱には銚子電鉄の車両が描かれており、その車輪は火がついているから“火の車”だ。

どこまでも面白く、そして明るい。

銚子駅に戻る電車に乗っていると、「銚子電気鉄道」と書かれた真新しいカバンを持った若い車掌が私たちの前を歩いてくる。

私が「新しいカバンですね」と声を掛けると、彼は「支給されたばかりでして・・・」と嬉しそうに答えてくれる。チームが「新入社員ですか？」と聞くと、彼は「一週間前に入社しました」と言っている。

私たちは顔を見合わせて「えー！一週間で実践投入？それに今はまだ3月だよ」と驚きを隠せない。それでも彼はニコニコ笑いながら「頑張ります！」と答えてくれる。

私は、なぜ赤字の銚子電鉄をあえて選んで入社したのかと彼に聞きたい気持ちがあったが、それを直前で押し止めた。それは、もしも彼が他に入れてくれる会社が無かったなど言ったら落胆するからで、私はそんな後ろ向きの返答を聞きたくなかったからだ。

私は言葉を選んで「若い人を採用する会社は経営者がその会社の将来に自信を持っている証拠だから、頑張ってね」と彼に伝える。彼は私の目を見ながら、そして自信ありげにしっかりした口調で「ありがとうございます！」と言いながら一礼をして仕事に戻っていった。

初々しくまだあどけない超新米の車掌だったが、純粋な目をしていて。

私は彼のその瞳の奥に何か熱いものを感じて、要らぬ心配をしたかなと思い始める。若者が責任ある仕事を任されて一所懸命に働いている姿はいつ見ても気持ちがいい。銚子電鉄のあの文言「電車をとめるな！」や「絶対にあきらめない」が再び私の頭の中をよぎってくるが、なぜか今は安心感に包まれて心配しなくなっている自分に気が付く。

思いもよらない感動をもらって爽やかな気分で銚子電鉄を後にした。



【銚電のチキンカレー】

旅には「期待と落胆」と「偶然と感動」という2つの側面があるというのが兼ねてからの私の持論だ。旅に出て期待していた事が外れると落胆し、反対に期待もせずむしろ偶然に体験したことに感動するというものだ。

奇しくも今回の旅はそれら両方とも実感することになった。

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。今回の宿は温泉宿ではないが記録に残す意味で泉質以外を評価してみた。

評価の基準は、5は驚き感動、4は普通に良い、3は可もなく不可もない、2は普通に悪い、そして1は失望落胆としている。

「伝九郎」の泉質は未評価、風呂2、料理4、コスパ3、サービス4、建物・部屋3、立地・環境3、総合点3.16になった。

■旅の記録

実施は2022年3月22日(火)～23日(水)の1泊2日、その行程を以下に示す。

- ・1日目 自宅を6時に出発し8時14分に五井駅到着、小湊鉄道乗車し8時52分発車
10時12分上総中野駅着、10時33分上総中野駅でいすみ鉄道に乗り換え、
10時54分大多喜駅着、大多喜城外観と研修館の展示を見物、そば屋で昼食、
14時42分大多喜駅乗車、14時59分大原駅着、20分歩き旅館「伝九郎」到着
- ・2日目 8時55分JR大原駅発、11時07分JR銚子駅着、銚子電鉄に乗り換えし11時15分発車
11時37分銚子電鉄終点の外川駅着、すぐに折り返し11時48分外川駅発車、
11時51分犬吠駅着、犬吠埼灯台を見物、12時40分犬吠駅発車、
12時42分外川駅で折り返し、13時05分銚子着、マクドナルドで昼食、
13時49分JR銚子駅乗車、総武本線、横須賀線乗り継いで19時頃帰宅

総費用は約2万4千円で、詳細は以下に示す。

- ・交通費 8866円
 - 房総横断乗車券 1730円 (小湊鉄道+いすみ鉄道乗り継ぎ片道切符)
 - 銚子電鉄1日フリー乗車券 700円
 - 相鉄線とJR線 自宅→五井 1810円
 - JR線 大原→銚子 1694円
 - JR線と相鉄線 銚子→自宅 2932円
- ・宿泊費その他 15400円
 - 旅館「伝九郎」宿泊費 13000円
 - 昼食(2回分) 1400円
 - 酒・つまみ 約1000円